

遊び歌の教材化に関する一考察

—マザーグースの遊び歌を中心に—

A Thought on Action Rhymes as Teaching Materials

— Focusing on Mother Goose Rhymes —

瀬谷元子

Motoko SEYA

目 次

1. はじめに

2. マザーグースの文化的背景とマザーグース遊び歌の発達の見地からの考察

(1) マザーグース及びその文化的背景

- 1) マザーグースまたはナーサリーライムとは何か？
- 2) マザーグースの中の遊び歌について

(2) 発達の見地からの身体運動について

- 1) 脳と発達について
- 2) 幼児期の発育, 発達の特徴について

(3) 発達の見地からのマザーグースの遊び歌の効用

3. 教材化できるマザーグースの紹介と内容

(1) アーチを作って誰かを捕まえる

- ①ロンドン橋おちた (London Bridge is broken down)

(2) 輪になって遊ぶ

- ①バラのまわりを (Ring - a - Ring o' Roses)
- ②桑の木のまわりを (The Mulberry Bush)

(3) 手合わせ唄

- ①ぺったんこ ぺったんこ (Pat - a - Cake)
- ②ホカホカ 十字パン! (Hot Cross Buns!)

(4) 顔遊び

- ①このベル鳴らそう! (Ring the Bell!)

(5) 指遊び

- ①このブタちゃん (This Little Pig)
- ②ヒコリ デイコリ ドック (Hickory, Dickory, Dock)
- ③二羽のことり (Two Little Dicky Birds)
- ④ノッコノッコ クモさん (Inchy Winchy Spider)

4. 結語

キーワード：マザーグース，ナーサリーライム，指遊び歌，手遊び歌，振り遊び歌

ナーサリーライム (Nursery Rhymes：幼児の音韻詩)

：イギリス伝承童謡と訳されている。“歌”というより韻を踏んだ“詩”の方が多い。

マザーグース (Mother Goose：がちょうおばさん)

：ナーサリーライムがアメリカに伝わって呼ばれる呼称。

【日本では、マザーグースが一般的であり、本論では「マザーグース」を使う。】

1. はじめに

幼児期の心身の健全な発達に適切な身体運動は不可欠である。発育・発達を促すための教育支援方法については、さまざまな研究が報告されている。その研究結果より、幼児期には全身的な表現運動や指遊び、手遊び等の末梢運動を幼児が快適に感じる楽しい音楽に合わせて行わせるのが効果的であると考えられている。

また、幼児期に、暖かさや信頼感を基礎としつつ五感による感受性を育成し、豊かなコミュニケーション能力を育ててゆくことは、幼児教育の主眼のひとつとも言える。幼児期は、言語による表現能力が未熟な時期である。コミュニケーション能力の獲得という見地からは、表情や身振り、動作、スキンシップ等、身体表現的活動の重要性が認識されている。

平成17年1月の中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方について」^①においても、「幼児期の発達の特性に照らして、幼児の自発的な活動としての〔遊び〕を重要な学習として位置付け」とともに、「幼児は遊びの中で主体的に対象にかかわり、自己を表出する。そこから外の世界に対する好奇心が生まれ、探索し、知識を蓄えるための基礎が形成される。」としており、幼児教育における「遊び」の重要性を指摘している。さらに、「幼児は身体感覚を伴う多様な活動を経験することによって、豊かな感性を養うとともに、生涯にわたる学習意欲や学習態度の基礎となる好奇心や探究心を培い、また、小学校以降における教科の内容等について、実感を伴って深く理解できることにつながる『学習の芽生え』を育んでいる。」としており、最初に述べた身体表現的活動の重要性が認識されている。

さて、私は18年間、つくば国際短期大学保育科の学生に「体育」、「身体的表現指導法」、「リトミック」等を教えてきた。この授業の中で「手遊び・指遊び」、「表現遊び」も取り上げ指導してきた。特に、「手遊び・指遊び」については、もっと教えて欲しいという学生の要望が非常に多かった。しかし他の内容も教える必要があったために現実には、要望に十分応えられてはいない。

一方、日本社会では、20世紀末から、よりグローバルな視点で生きてゆく人材の育成が必要とされている。そのために、小学校から大学にいたるまで、学校教育において英語教育の必要性が

高まり、より実践的に使える英語教育をめざして変革がなされている。小学校教育における英語学習の導入や大学入試センター試験におけるリスニングテストの導入等の例に見られる変革である。

幼稚園においても、英語の教育を行う園も多くなっている。その中で、簡単な英語の童謡（マザーグース）を学ばせる園も多くなっている。今後、保育士を目指す学生には、マザーグースの「手遊び・指遊び・振り遊び」を原語（英語）の歌とともに演じられることも必要である、と考える。実際にマザーグースを保育者養成機関の授業で教える場合には、適切な教材が必要であるが、この教材については、幼児の発達や文化的教育を考慮した考察が必要であると考えられる。

上のような観点に立ち、本論では、まず、マザーグースの文化的背景について考察する。次に、その中の「手遊び・指遊び・振り遊び歌」を取り上げるとともに、幼児の発達、発達を促すと考えられる面について考察する。さらに、その中から数曲を選択し、授業で実践できるように、教材化することについても考察する。

今回は、英語圏のマザーグースを中心とする考察を紹介することとし、日本のわらべ唄や童謡については、次の機会に紹介したい。

2. マザーグースの文化的背景とマザーグース遊び歌の発達の見地からの考察

私は、1983年8月～1984年9月〔ロスアンジェルス・オリンピックの年〕まで1年1ヶ月の間、夫の出張先であるアメリカのニューメキシコ州アルバカーキ市に、長女（当時1歳～2歳1ヶ月）を伴って住んだ。滞在先で、マイク・ハーリー・ダンススタジオに通いジャズダンスを学びながら子育てをしていた中で、教会で開いていた「International Friend's」に参加した機会に教えられた英語の童謡は「ナーサリーライム (Nursery Rhymes)」と呼ばれていた。（当時の私はまだ、マザーグースという言葉も、それがナーサリーライムとほぼ同様なものであることも知らなかった。）私がマザーグース (Mother Goose) という言葉を聞き、興味を覚えたのは、朝日新聞日曜版に1995年4月から連載されたイギリス留学中の鷺津名都江氏の記事によってである。この記事によって、マザーグースがナーサリーライムと近いものであることを知った。

岡田純也氏が、「日本においては、竹久夢二、北原白秋、竹友藻風、西条八十、木島始、谷川俊太郎、と通称マザーグースの翻訳紹介者は多く、それもかなり組織だった翻訳書もある。」と述べている⁹⁾ように、古くは大正時代からマザーグースの翻訳紹介がなされているが、当時の日本においては、マザーグースそのものは定着しなかった。その理由としては、岡田純也氏は「曲譜をつけられる機会が少なかった」ことと「素朴にとらえて、親しみにくかった」ことであろうとしている。

なお、北原白秋は、その著書「まざあ・くうす」(大正10年9月アルス)の序文では、「民謡なるものは、野山の木萱のそよぎそのものからおのづと湧き出たものである。初めは誰が歌ったとなく歌い出されて、つぎつぎに歌い伝えられて、歌い直されて、ほんとに洗練されたいいものばかりが永く残ることになったのである。で、その長い民族精神の伝統ということに就いて、十分に尊重しなければならない。この意味で日本在来の童謡の本源であり、本流である。」と述べ、また、巻末言では、

『母鶯鳥』(まざあ・くうす)もおなじく英語童謡の本源とみなしていいであろう。」と述べ、現代に歌い継がれてきている童謡は、それが作られた国の民族精神を本源としてもっていることに注目している。

マザーグースに関する著作は、単なる童謡の紹介にとどまらず、神話、伝説、昔話(あるいはその由来検討)、創作詩にまで及んでいる。マザーグースに心理学的な分析を加えたものもある。2006年の現在、日本においては、英語圏の童謡であるマザーグースが、系統立てて研究され、曲譜つきで(英語で)歌唱される本来の形で紹介されてきている。このような本来の形のマザーグースが日本の中に定着してきたのは、ここ20年位のことであると推測される。

ちなみに、茨城県立図書館にて、「マザーグース」を検索すると103項番が現れ、また、「ナーサリーライム」では5項番が現れる。これから推察すると、現在の日本においては、英語圏の童謡の呼称として「ナーサリーライム」より「マザーグース」が一般的に浸透していると言える。これはイギリスのナーサリーライムがアメリカに渡ってマザーグースとなり、アメリカ経由で日本に導入されたという説を実証しているように思う。

以下、マザーグースの文化的背景、発達の見地からの身体運動及び発達の見地からのマザーグース遊び歌の効用について文献により考察してゆく。

(1) マザーグース及びその文化的背景

1) マザーグースまたはナーサリーライムとは何か?

鷲津名都江氏の著書⁽²⁾⁽³⁾では、マザーグースまたはナーサリーライムについて以下のようにまとめられている。

「マザーグース」は、英語圏の子ども達が読んだり、遊んだり、歌ったりする伝承童謡のアメリカや日本での総称で、同様なものは、イギリスでは、ナーサリーライムと言われ、その数は800~1,000以上である。これらは日本のわらべ唄と比較すると、ジャンルがもっと広く、多様であり、遊び歌、子守唄だけではなく、なぞなぞやナンセンス詩、物語詩、昔話、格言、早口言葉、男女の心模様を歌ったものなどがあり、子どもだけではなく、大人も楽しめるような詩がたくさんある。また、歌というより曲のない詩の方が多い。古いものは何百年にもわたって口伝えで伝えられてきている。マザーグースのほとんどの詩は、いつ、誰がつくったのか、はっきりわかっ

ていない。日本で知られている「キラキラ星」,「メリーさんの羊」や「ロンドン橋おちた」等もマザーグースである。

英語圏の文化や文学を理解するには、聖書、シェイクスピア、そして、マザーグースが三大必須と言われている。英語圏では、誰でも百以上はマザーグースを知っているとされ、日常会話には当然のこと、政治、経済の記事の見出しや文学、映画のタイトルに人物批評にと、そのフレーズやキャラクターが頻繁に使われる。

「ナーサリーライム」は、日本語ではイギリス伝承童謡と訳されているが、“歌”というより韻を踏んだ“詩”である。この“詩”は、英語の強弱のリズムが規則的に繰り返されることと、韻を踏むことにより同じ音が繰り返されるこちよい響きを与えるものである。英語の強弱のリズムとは、ストレス（強勢）つまりアクセントのある音節ない音節が規則的に並ぶことである。英語の“詩”を口ずさむと、まるで音楽の二拍子のような強弱、ワルツのような強弱弱あるいは弱弱強、アウトタクト弱強といったリズムが出てくる。そして韻を踏むということは、簡単に言えば同じ音の響きの繰り返しのことで、頭韻、脚韻などいくつかの種類がある。マザーグースで最も多く登場するのは、行末で韻を踏む脚韻である。特に、ナンセンスなマザーグースでは、行末で韻を踏む言葉をうまく選ぶことにより、日本語の掛け詞や駄洒落的な面白さが生じる。

また、夏目康子氏はその著作⁴⁾で、「マザーグースの唄に登場するのは、王・王妃から泥棒、乞食まで、また赤ん坊から老人まで、善人、聖人から悪人までと多種多様です。人生というタイムスパンで見ると、誕生・幼児期・学童期・青年期・壮年期・老年期から死まで扱っています。さまざまな人物像はもちろんのこと、人間を取り巻く動物・鳥・昆虫・植物・天候などの自然界についても一編の唄に切り取って見せてくれます。さまざまな人物や人生や自然を垣間見せてくれるマザーグース的何でもありの世界は、シェイクスピア的豊穡の世界に通じるところがあるのではないのでしょうか。」と述べ、さらに、「率直で飾り気の少ない言葉で人々に何百年も歌い継がれてきたマザーグースには、民衆の生きてゆく知恵や魂が込められているといってもいいでしょう。」と述べている。

2) マザーグースの遊び歌について

マザーグースの遊び歌について、日本の遊び歌と類似的な例を挙げると次のようである。

以下に示す表の例のように、日本の遊び歌にもマザーグースにもスキンシップをしながら乳幼児と遊ぶ類似的な歌があり、昔からの母親の愛情表現は共通のものであり、興味深い。

ここで、本論の趣旨からは少しはずれるが、日本の遊び歌とマザーグースの歌詞を検討してみると、似たような背景的な解釈が考えられていることも、興味深い。遊び歌として例示した歌の中から「ロンドン橋おちた」と、日本の「かごめかごめ」と「とおりゃんせ」についての興味深い解釈が、夏目康子氏の著作⁴⁾に以下のように紹介されている。

ロンドン橋は、作っても作っても橋が落ちるので、橋の材料が次々と変わって行く。木と土か

遊 び 方	日本の遊び歌	マザーグースの遊び歌
アーチを作って最後に誰かを捕まえる	「とおりゃんせ」 等	「ロンドン橋おちた」 (London Bridge is broken down) 「オレンジとレモン」 (Oranges and Lemons) 等
輪になって遊ぶ	「かごめかごめ」 「ひらいたひらいた」 等	「バラのまわりを」 (Ring - a - Ring o' Roses) 「桑の木のまわりを」 (The Mulberry Bush) 等
手合わせ	「せっせっせ」 等	「ぺったんこ ぺったんこ」 (Pat - a - Cake) 「ホカホカ十字パン！」 (Hot Cross Buns!) 「あつあつ豆がゆ」 (Pease Porridge Hot) 等
顔遊び	「上がり目, 下がり目」 等	「このベル鳴らそう！」 (Ring the Bell!) 等
指遊び	「一本橋こちょこちょ」 等	「このブタちゃん」 (This Little Pig) 「ヒコリ デイコリ ドック」 (Hickory, Dickory, Dock) 二羽のことり (Two Little Dicky Birds) ノッコノッコ クモさん (Inchy Winchy Spider) 等
お馬さんごっこ	「金太郎」 等	「木馬に乗って」 (Ride a Cock-Horse) 「市場へ 市場へ」 (To Market, to Market) 等

ら始まり、レンガとモルタル、鉄とはがね、銀と金というふうに変わって行くが、最後に登場するのは橋を見る番人である。この『番人』とは、実は橋を作る際に犠牲として捧げられた人柱を指しているのではないかという解釈がある。事実、世界中で、橋の建設の際、人柱を捧げた実例が報告されている。「ロンドン橋落ちた」のゲームは、子ども達のうちの2人が手をつないでアーチをつくり、その下を一列になった子ども達がくぐりぬけていくという遊びである。唄の最後のリフレイン「マイ・フェア・レディ」のところで降りてきたアーチに捕まえられる子どもが、アーチ役の子どもの後ろにつく。列になってくぐる誰のところかアーチが落ちてくるのだろうか。唄の最後の部分が近づくにつれ、子ども達は自分が捕まらないようにくぐるスピードを速めてゆく。この遊戯唄は子ども達に人気があるが、アーチが降りてきて誰かを捕まえるというのは、昔橋作りのための人柱を選ぶ儀式のなごりではないかという見方もある。それが本当だとすれば、怖い唄であり、怖い遊びである。

日本の遊戯唄はどうだろうか。日本では「かごめかごめ」、「とおりゃんせ」、「はないちもんめ」などがよく知られているが、いずれの唄も歌詞をよく検討してみると、怖い内容を含んでいるこ

とがわかる。たとえば、「かごめかごめ」は「つるとかめがすべった」のあとに、「後ろの正面だあれ」と続く。「後ろの正面」とは何か。鬼になった子どもは輪のなかで両目をふさいでしゃがんでいるのだから、そもそも正面すら見えるはずがない。それなのになぜあえて、後ろの人物について聞くのだろうか。「後ろの正面」とは異界にいる人物を指しているのだろうか。

「とおりゃんせ」の歌詞は、「行きはよいよい、帰りはこわい、こわいながらもとおりゃんせ、とおりゃんせ」と終わる。行きはよいのだが、帰りがこわいはどういうことだろうか。行ったには行ったが、異界に迷い込んで帰れなくなってしまったのだろうか。実は「こわい」というのは東北地方の一部の地域で、「疲れた」の意味を表す方言である。行きは楽だったが、帰りは疲れたというのは論理的にはわかりやすい。だが、その意味ではなく「怖い」の意味でとると、楽々で行けたが、帰りは恐ろしいことが起こるとい意味の唄になり、帰り道に厄災がふりかかることを予告した唄になる。(夏目康子氏の紹介終わり)

このように、伝承遊び歌のマザーグース、日本のわらべ唄、いずれにしても、古い時代の記憶がこめられており、深淵な解釈も可能となり、現代においてはファンタジーとなっている。

(2) 発達の見地からの身体運動について

1) 脳と発達について

生まれた時の脳には、140億とも200億とも言われる神経細胞がある。出生時すでに成人と同数だけあるが、神経細胞間のつながり(情報回路)は発達していない。成長するにつれ、神経細胞からたくさんの神経線維(樹状突起)を伸ばしてシナプスをつくり、情報回路を発達させてゆくことで、知能的、機能的な働きを増してゆく。情報回路を発達させるためには、乳児期の母親の働きかけが大切である。体をさすったり、ゆすったり、呼びかけたり話しかけたり、いろいろな表情をみせたり、一緒に遊んだりすることが大事な刺激となっている。これらの刺激に対して、さまざまな反応をし、やがてこの反応はまとまりを持つようになり、ひとつの動作へと発達してゆく。こうして3歳ごろまでに脳の情報回路は8割ほど完成してゆくと、言われている。

また、脳は感覚分野から発達しはじめ、一番先に発達するのが視覚、聴覚である。ついで1歳から3歳ころにかけて言語の分野、その後に情操や意欲の分野が発達してゆくといわれる。と同時に、これらの基礎を支え、学習の能力を伸ばす、記憶、認知、理解、感情、創造などの分野も相互作用によって徐々に発達してゆく、と言われている。

幼児期だけでの問題ではなく、一般的には、脳を活性化させ、脳を健康を保つためには、脳の細胞を活発に働かせて、神経細胞間の伝達を盛んにしてゆくことであり、すなわち、頭をよく使い、体をよく動かすことである。特に、手先を器用に動かすようにすると、大脳皮質の運動野が刺激を受けて血流量が増え、また、まわりの脳の部分にもよい影響を与えるといわれている。(以上、文献^⑥のより)

2) 幼児期の発育、発達の特徴について

幼児期の身体発達の特徴は神経系の発達が著しいことであり、運動機能の発達の面から考えると、この時期に全身運動が不足すると、運動機能の発達が助長されず、運動能力が劣る不器用な子どもになってしまうおそれがある。また、運動機能の発達は、精神、心理、情緒、社会性、言語の発達と相互に作用しあい、関連しあっており、全般的な発達支援が必要とされる。

また、発育、発達には、以下に示すようないくつかの基本的な方向性が認められる。

○頭部から下部の方向へ進む

眼球運動 → 上肢の運動 → 下肢の運動 と運動機能が発現

○中心部から末梢方向へ進む

身体の中心部が末梢部よりさきに成熟する

(例：上腕の運動は、指先の運動より先に発現する)

○粗大から微細への方向へ進む

(例：乳児の手の不器用な運動が、発育とともに、しだいに細かい、分化した、目的にあった正確な運動に発達してゆく)

さて、幼児期の精神運動機能発達の特徴は次のようである。

3歳：幼児前期のひとつの節目であると考えられ、手足、全身の協応動作が巧みさを増し、力も増すなどその成熟の兆しが著しく、一段とその発達が見られる。

4歳：背が伸びてきてスタイルがよくなり、体の格好にバランスがとれてくる。この時期は大筋群の発達するときで、常に体を動かして運動することを好む。4歳後半では急激に巧緻性が発達し、まりをついたり、平均台、鉄棒などで技巧的な運動を楽しんだり、はさみを使って紙を切ったり、たくみに自分の体や指先を動かすことに興味を示す。上達に意欲をもって、自分から進んで練習するようになる。

5歳：順調に育ってきているならば、身体全ての機能、たとえば、神経系の支配に関する調整力は著しく伸びてきている。敏捷性が増し、手先の細かな運動もできるようになり、全体的、身体的活動もできるようになり、全体的、身体的活動もいっそう巧みになって、道具を工夫したり、操作したりすることや、バランスをとる感覚も一段と成熟してくる。また、平衡感覚の発達、社会的適応の増大に加えて、スキップなどの協応動作もなめらかにできるなど、自然的な動作が見られる。また、ダンスなどでも音楽に合わせることも上手になる。これは複合的に身体的運動が著しく成長していることを示す。(文献⁶⁾より)

(3) 発達の見地からのマザーグースの遊び歌の効用

上記(2)2)で述べた幼児期の発達の特徴を考慮し、年齢に応じたマザーグース遊び歌を示すと、次のようになる。

遊 び 方	マザーグースの遊び歌	適用年齢
アーチを作って最後に誰かを捕まえる	「ロンドン橋おちた」(London Bridge is broken down)	3歳～
	「オレンジとレモン」(Oranges and Lemons)	4歳～
輪になって遊ぶ	「バラのまわりを」(Ring-a-Ring o' Roses)	3歳後半～
	「桑の木のまわりを」(The Mulberry Bush)	4歳～
手合わせ	「べったんこ べったんこ」(Pat-a-Cake)	3歳～
	「ホカホカ十字パン！」(Hot Cross Buns!)	4歳～
	「あつあつ豆がゆ」(Pease Porridge Hot)	3歳～
顔遊び	「このベル鳴らそう！」(Ring the Bell!)	2歳～
指遊び	「このブタちゃん」(This Little Pig)	2歳～
	「ヒコリ デイコリ ドック」(Hickory, Dickory, Dock)	3歳～
	「二羽のことり」(Two Little Dicky Birds)	4歳～
	「ノッコノッコ クモさん」(Inchy Winchy Spider)	4歳～
お馬さんごっこ	「木馬に乗って」(Ride a Cock-Horse)	3歳～
	「市場へ 市場へ」(To Market, to Market)	4歳～

3. 教材化できるマザーグースの紹介と内容

茨城県には、つくば市、東海村、那珂市のように国際性豊かな地域がある。東海村のある幼稚園では、毎年2～3人の外国人幼児が入園してきている。このような幼稚園では、日本でもよく知られたマザーグースの遊び歌（例えば、ロンドン橋おちた」(London Bridge is falling down), 「桑の木のまわりを」(The Mulberry Bush) 等) を遊びに取り入れている。また、アメリカワシントン D. C. 在住の姪（現在10歳）は、毎年夏、日本に里帰りするが、その折に演じて見せてくれる「Inchy Winchy Spider」あるいは「Two Little Dicky Birds」は、アメリカではごく一般的な遊び歌であり、幼稚園で教えられている。

日本でもよく知られたものや、日本の遊び歌と類似な遊び方をするマザーグースの遊び歌で、教材として教えられるものとして、次のようなものが挙げられる。なお、英語の歌詞については、文献⁹⁾を用いた。

(1) アーチを作って誰かを捕まえる

①ロンドン橋おちた (London Bridge is broken down)

London Bridge is broken down, Broken down, broken down, London Bridge is broken down, My fair lady.
--

Built it up with wood and clay,
Wood and clay, wood and clay,
Built it up with wood and clay,
My fair lady.

Wood and clay will wash away,
Wash away, wash away,
Wood and clay will wash away,
My fair lady.

(2) 輪になって遊ぶ

① バラのまわりを (Ring - a - Ring o' Roses)

Ring - a - Ring o' Roses,
A Poket full of posies,
A- tishoo! A- tishoo!
We all fall down.

② 桑の木のまわりを (The Mulberry Bush)

Here we go round the mulberry bush,
The mulberry bush, the mulberry bush,
Here we go round the mulberry bush,
On a cold and frosty morning.
This is the way we wash our hands,
Wash our hands, wash our hands,
This is the way we wash our hands,
On a cold and frosty morning.

(3) 手合わせ唄

① ペったんこ ペったんこ (Pat - a - Cake)

Pat - a - cake, pat - a - cake, baker's man.
Bake me a cake as fast as you can;

Pat it and prick it and mark it with B,
Put it in the oven for Baby and me.

②ホカホカ 十字パン！ (Hot Cross Buns!)

Hot Cross Buns! Hot Cross Buns!
One a penny, two a penny,
Hot Cross Buns!
If you have no daughters,
Give them to your sons;
One a penny, two a penny,
Hot Cross Buns!

(4) 顔遊び

①このベル鳴らそう！ (Ring the Bell!)

Ring the Bell!
Knock at the door!
Draw the latch!
And walk in.
Chin Chopper, Chin Chopper, Chin Chopper!

(5) 指遊び

①このブタちゃん (This Little Pig)

This little pig went to market,
This little pig stayed at home,
This little pig had roast beef,
This little pig had none,
And this little pig went,
“Wee, wee, wee, wee, wee!” all the way home.

②ヒコリ デイコリ ドック (Hickory, Dickory, Dock)

Hickory, dickory, dock,

The mouse ran up the clock.
The clock struck one,
The mouse ran down,
Hickory, dickory, dock.

③二羽のことり (Two Little Dicky Birds)

Two little dicky birds,
Sitting on a wall,
One named Peter,
One named Paul.
Fly away, Peter!
Fly away, Paul!
Come back, Peter!
Come back, Paul!

④ノッコノッコ クモさん (Inchy Winchy Spider)

Inchy Winchy Spider went up the water spout;
Down came the rain drops and washed the spider out;
Out came the sunshine and dried up all the rain,
And Inchy Winchy Spider went up the spout again.

これら振り動作を伴うマザーグースは、幼児にとっては楽しみながら自然に身体を動かすことで、身体の発達を促されることになる。また、マザーグースに内在する違った国の文化的価値や伝承の中に秘められた教育力を期待でき、コミュニケーション能力の発達の助けにもなると考えられる。

4. 結語

本論では、マザーグースの文化的背景について考察するとともに、教材化する際に取り上げるマザーグースの遊び歌として、「手遊び歌、指遊び歌、振り遊び歌」で、その遊び方が日本の遊び歌と共通するものを比較検討するとともに、それらが幼児の発育、発達を促すと考えられる面に

についても考察した。さらに、日本及びアメリカ等でごく一般的に知られているもの、幼稚園で教えられているものから、数曲の遊び歌を教材に適したものとして紹介した。

マザーグースには、異文化の伝承として民衆の生きてゆく知恵や魂が込められており、遊び歌の中には、スキンシップをしながら乳幼児と遊ぶ歌があり、コミュニケーション能力獲得の基礎となる要素が内在しているといえる。これらのことから、マザーグースを教材として教えることにより、英語圏の異文化の体験と同時に身体発達に関する内在的な教育力が期待できるものと考えられる。

最近では、アメリカの幼児のための遊び歌（指遊び歌、振り遊び歌）が日本の教育TV等で紹介されている。私は、その中のいくつか【「頭、肩、ひざ、足と手」、「お父さん指」とか「ぼきぼき踊り」等】は、これまでも授業で取り上げ、日本語と英語の両方で歌えるように教えてきた。

ここで紹介したマザーグースも、授業で教える教材として活用してゆくなら、現代のニーズに応えられる保育士の養成に役立つと考えられる。また、幼児期の身体的運動発達を促す視点から、マザーグースの全身を使った遊び歌や指先を使った遊び歌を、幼児の成長に合わせて活用して行こうならば、身体の運動発達のみならず大脳皮質の運動野が刺激を受けることで脳の発達も促すことになり、心身のバランスの取れた発達により効果をもたらすと考える。

もちろん、日本の童謡についても同様である。わらべ唄や新しい指遊び、振り遊びについても、その価値を認識し活用してゆく必要があると考える。

引用文献

- (1) 中央教育審議会答申（平成17年1月）「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方について」文部科学省。
- (2) 鷺津名都江著（1996年6月）「マザーグースをたずねて」筑摩書房P7.
- (3) 鷺津名都江著（2004年12月）「よもう うたおう！ マザーグース」講談社P38, P54.
- (4) 夏目康子著（2003年5月）「不思議の国のマザーグース」柏書房P333, P264-266.
- (5) 岡田純也（昭和51年11月）「マザーグースの日本における研究紹介の足跡」日本児童文学。
- (6) 石井美晴著（2005年4月）「保育の中の運動遊び」萌文書林。
- (7) NHK取材班（1994年6月）「驚異の小宇宙・人体Ⅱ 脳とこころ 第5巻秘められた復元力〔発達と再生〕」日本放送出版協会。